http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.259　03/09/30

勉強するって何だろう

いよいよ勉強の後期だが、勉強するって何だろう？　その一つの答えとなるような文を（一年次にも紹介したが）再掲してみよう。

書いたのは、80年代、東大駒場で自らを「みみずく」になぞらえ、詩と本とパイプとウィスキーをこよなく愛した名物英文学教授の由良君美。その由良先生のエッセイ、『みみずく偏書記』（ちくま文庫）は、「知」のディープな世界にひたって（溺れて？）みたい人には、格好の材料である。

＊

そういう或る日、教文館の書棚にバーグのこの本（『動機の文法』の原書）が、どういう偶然からか一冊並んでいたのである。厚い本だったし、著者の名前は勿論、題からして全く内容の見当がつかない異様な本だった。目次も実に異常で、一向に内容を語ってくれなかった。

しかし、何やら妙に心を奪うものがあり、高い本だったが、決心して買うことにした。帰りの電車のなかで読みだしたが、バークの英語もこれまた異常で、なかなか頭に入ってこない。イライラしながら、良く分からない冒頭の部分を飛ばし、先のページをどんどん繰り始めた。

突然コールリッジの名前が眼に飛びこんできた。コールリッジは高校の頃から親しんできた詩人哲学者だったから、オヤと思い、巻半ばのその箇所から、再び読み始めることにした。コールリッジが若い頃、情熱をもやしたアメリカのサスケハナ河畔のユートピア計画、パンティソクラシーのことを、バークはそこで論じているのだった。

事柄を知っているということは恐ろしいものだ。少なくとも、そこでバークが論じている、ユートピアの論理の根底に必ず潜む必然論のロジックの意味は、バークの難解な筆の運びを飛び越して、すぐにすらすらと頭に入ってくるではないか。

その箇所が突破口になった。あとは、よく見透せない目次の森をさまようことは止め、索引にたよることにした。索引の中から、自分の知っている人名、心ひかれる事項をひろいだす。それをつぎつぎに、飛び交うように読んでゆくのだ。ところどころ分かる。そのところどころが次第に頭のなかに点々と拠点を造り、その拠点が関心の網を次第に脳内に造りあげ、互いに互いを引きつけ合ってゆく運動が、自分でも分かるのだった。

＊

「事柄を知っているということは恐ろしいものだ。」とあるが、ここに今君たちが勉強していることの意味を考えるヒントがあるように思う。つまり、世界史でも化学基礎でも家庭基礎でも、今学んでいる知識がきっかけとなって、より広く豊かな「知」の世界へ、自分がやってみたかった何ものかの世界へと旅立てるようになるのである。自分のやりたいことを見つけようとしている時に、いや、もっと直接的にいえば、大学入試の問題を解く時に、今学んでいる一見何の関係もなさそうな知識が「互いに互いを引きつけ合って」大きな力となってくれるのである。

不必要な勉強・知識など何もない。高いレベルの授業を受けられることに感謝して、結びつくべき材料を自分の中に貯めていこう。